

影を偲ぶことができます。また城壁の外にローマ帝政末期からの古い墓地があり、風雨に晒されながらも千年以上の歴史に耐えてきた沢山の石棺が道の両側に並んでいます。アルルはローヌ川の河口にあつたため、ガリア地方に対する文明の玄関口にあたり、またガリア地方で徴集された穀物租税が海路によりローマの外港オステティアに運ばれたため、その積出港として栄えたのでしよう。今でも船頭組合に関する碑文をみることができます。

以上は全くの一例にすぎませんが、アルルのような都市がそれぞれの風土に適應しながらもローマ都市の基本的性格を失うことなく、地中海沿岸の各地に建設されたと考えられます。自分の目でローマ都市の遺跡を見学する機会を与えて下さいました関係の諸研究所や諸先生に深く感謝いたします次第であります。

(追記 この報告発表後、『古代文化』財団法人古代学協会刊)に「古代史研究の旅から」という標題のもとで紀行を書いております。(浅香)

学界消息

読史会

昭和四三年九月例会

九月一日(土)午後一時より

於 京大・楽友会館

鎌倉幕府庄郷地頭制の成立

昭和四三年度秋季大会

十一月三日(祝)

於 京大文学部第六講義室

平安京の宅地配分と班田制について

秋山 国三

若林喜三郎

いわゆる加賀藩騒動の史的背景

平安時代における宮廷陰陽道の形成

横井小楠の思想系列について

歴史的要求・教育的要求

十七条憲法の一考察

古代税制と屯倉

福沢諭吉の政治観

天平十三年国分寺創建詔について

任那諸国の国家成立

「興業意見」の成立

里神楽考

上横手雅敬

東洋史談話会 昭和四三年度大会

昭和四三年十一月三日(祝)午前九時〜午後五時

於 京都大学法経第七教室

明清時代における荒政と地主佃戸制

『左伝』に見える「叛」

銅虎符・竹使符に関する一考察

桑弘羊の均輸法について

後漢の西園軍

ワリーウツラーの社会理論

Tonyquq 碑文に見える一可汗について

四オイラートの住地について

宋代官田に於ける佃權と剝佃

——租種管業田について——

元典章と通制条格について

明代鄉村社会の身分構成

章学誠・龔自珍・章炳麟

内陸アジア研究会 例会 於羽田記念館

五月八日(水)

アリ・エクベルの『中国記』とオスマン・明

兩朝の通交について

七月三日(水)

マムルーク朝時代の商業問題

八月五日(月)

古林 清一

小田 寿典

森 正夫

小倉 芳彦

大庭 脩

影山 剛

鎌田 重雄

加賀谷 寛

護 雅夫

K・メンゲス教授を囲んで

九月一日(水)

ハンガリーにおける東洋学

一〇月二日(水)

ワシントン大学の東洋学

一二月九日(月)

ビザンツの国家と経済

米田 治泰

内陸アジア研究会 講演会

一月九日(土) 於羽田記念館

アルタイ比較言語学上の問題点——語彙論

長田 夏樹

モンゴル人民共和国の現状

小沢 重男

現代のアラブ世界

M・アニス

日本西蔵学会 大会

十一月一日(土) 於羽田記念館

ドゥク派本山座主の相続形態について

中井 英基

チベットにおける戒律の伝統について

小玉 大円

摩訶衍とその周辺

立花 孝全

チベット文字で書かれた新言語「トス語」について

西田 龍雄

五体清文鑑のチベット語について

北村 甫

A Literature from Tun-Huang Manuscripts

Rolf A. Stein

西洋史読書会

例会 於 京大西洋史研究室

昭和四三年七月一三日(土)

ビュリタニズム解釈の問題点

——ひとつのナショナリズムとして——

一〇月二日

マツイーニとブオナロッティ

一〇月二六日

ゲルツェン研究史

第三六回秋季大会

十一月三日(祝) 於 法経第八教室

「大レトラ」の追加個条について

一〇月二六日

ヘレニステイック時代のサマリアについて

一〇月二六日

ローマ帝政末期の農業労働

一〇月二六日

——コロナートゥスについて——

神政君主制と封建制度

——国家理念よりみたノルマン征服前後

史——

ヨハンネスのレース・プブリカについて

初期ヒュ머니ストと医学

ロック初期思想における国家と宗教

ロシチューシヨロの故国観

永岡 蕉

——ナポレオン時代を中心に——

アレクシス・ド・トックヴィルに関する一考

察——その革命観を中心として——

第三国会におけるカデットの農業政策

電撃戦の政治的意味

読書会秋季大会反省会

宗教改革時代の再洗礼派について

一四・五世紀イスラム史の一面

人文地理学会 昭和四十三年度大会

昭和四三年十一月二日(土) 五日(火)

於 京都大学法学部・経済学部

特別研究発表 一般研究発表

十一日(月) 五日(火) エクスカーション

第一班「先志摩」方面(泊二日バス利用)

第二班「神戸」方面(日帰り、バス利用)

古地図資料展 十一月三日(日)

於 京都大学文学部地理学実習室

大会研究発表題目

日本のトラック輸送に関する地域的な諸問題

有末 武夫
石井 素介
戦後日本の農業地域変動について
いわゆる新大陸原産農作物の中国への伝播経
路について——第一報——

千葉 徳爾
松田 信
地理的複合体概念の展開
中心地とエラルヒーの遷移

森川 洋
松尾神社領東郷庄中分図の考察(スライド使
用)

渡辺 久雄
竹岡 林
城の構成要素としての植物帯

三浦 保寿
椎葉村宗門帖の分析
「延喜式」にみる交通集落としての駅家の機
能的分類と問題点

藤岡謙二郎
中島 義一
明治前期の町——上総の場合——

細井淳一・塩坂邦雄
(スライド使用)
静岡市域に関する地理学的研究——第一報——

阪神大都市圏の郊外化に伴う奈良県の変容過
程——奈良市における最近の農地転用の進
展と市街地化並びに人口移動について

西田 和夫
電子部品工業の地方的展開

佐々木清司・斎藤幸男
福井機業と石川機業の相違

板倉 勝高
世界における死亡の季節変動形態(スライド
使用)

初山政子・福田勝久
採苗漁村——水産養殖の分業化から——

大島 斐二

山口県沿岸市場の流通動向と問題点

新宅 勇
米良荘における林野の利用と所有

甲斐 龍夫
剣山地における農民離農にみられる地域構造

大迫 輝通
周南地域の農地の減少と農業の後退

新宅 暢久
都市化時代における村落構造の再編成につ
いて

渡辺 操
昭和四三年二月一日(土)午後二時より
第七九回例会

於 帝塚山大学
領海接続水域・漁業専管水域

島田 正彦
ルイジアナの自然

水山 高幸
歴史地理部会
第二五回

昭和四三年二月二日(土)午後二時
於 京都大学文学部

庚午(明治三年)戸籍の歴史地理学的意義
——井戸庄三氏の報告を中心として——

日本地理学会
一九六八年度 秋季大会

会場 鳥取市湖山町 鳥取大学教育学部
日程 一〇月五日(土) 一四時より一七時

公開講演(会場県庁講堂)
一〇月六日(日) 一三時より一六時三〇分

エクスカーションAコース鳥取砂丘

一〇月七日(月) 九時より一六時
シンポジウム

1. 海岸砂丘——その自然と開発——
世話人(谷岡武雄)

2. 後進地域の地域開発
世話人(河野通博)

一〇月八、九日 エクスカーション
Bコース(一泊二日) 鳥取海岸と大
山

Cコース(一泊二日) 鳥取県と中海、
安道湖周辺

Dコース(一泊二日) 鳥取県と中国
山地

日本古文書学会 第一回学術大会
昭和四三年六月八日(土)・九日(日)

於 早稲田大学 小野梓記念講堂
《公開講演》

ジャカルタ文書館の公証人役場文書について
岩生 成一

《研究発表》
理趣経緯等策子をめぐって

——三十帖策子第十五帖について——
公式文書における信憑性の問題

竹取物語の商業文
平安時代の仮名書状の文学性

久曾神 昇
真保 龍敵
勝野 隆信
服部 嘉香

鎌倉時代に写された西蔵文字

筆跡の恒常性について

交木板碑の史料性

福正字の牛玉宝印について

本居宣長の書簡

出雲神魂神社の古文獻

織田信長と浅井長政との握手

信州秋山銅山について

——正徳明幕府の御用銅政策と関連して——

天眞寺所蔵の松平不昧・月潭の書状につ

いて——

中山法華経寺文書について

地方文書より見た代官領の性格

旗本石河政平の死

栃木県における古文書類所在の概況

神護寺実録帳について

後北条氏と金剛王院融山

——安房妙本寺文書を中心に——

金鶴形一封——琉球より清への謝恩——

金山 正好

猪刈 秀一

千々和 実

中村 直勝

木代 修一

村田 正志

奥野 高広

菊地 義美

志水 正司

中尾 堯

村上 直

川村 優

徳田 浩淳

福井 俊彦

小笠原長和

宮田 俊彦

会 告

委員 前川 和也氏は京都大学人文科学研究所助手に就任のため委員を辞任されましたので、代って大戸千之氏が委嘱されました。右、お知らせいたします。

委員会だより

◇ 日本学術会議第八期の会員選挙の結果、
本会推薦の井上智勇氏は史学第一位で当選されました。会員各位の御援助を深く感謝いたします。日本学術会議の直面する問題は、日本の学術体制にとってますます重大性を加えてきておりますが、井上氏が、過去三期にわたる豊富な経験を生かされ、一層ご活躍されますよう、御願する次第であります。

◇ 昭和四十三年から四十四年、各大学で爆発しつつある学生闘争は、『史林』の発刊にもさまざまな影響を与えつつあります。幸か不幸か、本誌は今までに発刊がおくれておりますので、特には目立たない訳であります。結局本号までにとりかえし得ませんでした。

◇ 学生闘争によって提起されている問題は多岐にわたりますが、学問のあり方と

してどう受けとめるか、むろん委員会でも討論しています。委員会の構成者は、戦中派、戦後派、そしていわゆる安後派となりますが、歴史学への主体的なとりくみ方に、かなりの差があります。新制大学が発足してからもすでに二十年、その間の歴史学・地理学・考古学を、あらためてふりかえってみる必要を痛感するのであります。

◇ さしあたり委員会の意向としては、より若い世代によって、戦後史学をふりかえる例会をもちたいと考えていますが、皆様から、戦後史学の評価をめぐって原稿をお寄せ下さることを期待いたします。

◇ 毎度ながら、誌代のご納入をよろしく。

史 林 (第五二巻第一号)

一九六八年二月二五日印刷 定価三〇〇円
一九六九年一月一日発行

発行人

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内

史 学 研 究 会

理事長 井 上 智 勇

印刷所

京都市下京区西七条御所ノ内中町五〇
中村印刷株式会社